

# 北東北における古代住居の一例について

高 島 成 侑\*

## One Study on the Ancient House in the North Tohoku District.

Takashima SEIYUU

### Abstract

One site of house was discovered in HATTYAZAWA-Site of AOMORI prefecture at 1987. The site of house was built the hole house together with building of setting up a pole in the ground hole. They belonged to 10th century. And we can find them in AOMORI and AKITA prefecture.

We think that, in them, the hole house was dwellings, and the building of setting up a pole in the ground was the house of domestic animals or working area.

### 1. はじめに

ここ数年の間に、北東北3県においても多くの古代集落遺跡が発掘調査されて報告書が刊行されており、この地方における古代住居に関する知見も増えたのであるが、現在でも、これまでの報告に無いような住居跡が検出される場合がある。これらを新しい型の住居跡として捉えたとしても、以前に報告されたものとの関連やこれからの調査方法との関わりで、大きな問題を投げ掛けるようなものが、次々に検出されている状況である。

ここでは、青森県六ヶ所村の発茶沢(1)遺跡において検出された住居跡を対象として、これまでに報告されている類例とも比較しながら、その形態的特徴を考察し、北東北における古代住居の在り方についての一例として論述するものである。

発茶沢(1)遺跡は、1986年から2か年にわたって、青森県埋蔵文化財調査センターが調査した遺跡であり、古代においてかなり大きい集

落が営まれた跡であった。27棟におよぶ竪穴住居跡と、それと時期を同じくする10棟の掘立柱建物跡とが検出された。そして、これら多くの竪穴住居跡のなかで、11棟のものにおいては、竪穴住居跡に掘立柱部分に取り付くような建物跡が検出されたのである。

このような形で建物跡が検出されたのは、竪穴住居跡の内部に明確な柱穴を検出することができずに、その外側に調査の目が向いたからに外ならないのであるが、その結果、竪穴住居跡の竈跡が造られている側に外に延びる形で〔2間×2間〕あるいは〔2間×3間〕の掘立柱の柱穴が並び竪穴住居跡の附属部分というよりは、竪穴部分と一体となった住居跡として見るべきものが検出されたのである。

土師器を主体とした出土遺物の調査や、2層になって検出された火山灰の調査などから、この遺跡は10世紀半ばから11世紀の早い時期のものということであり、この大きな集落が存続したのはそれほど長いものではなく、ごく短い期間であったことが知られている。

この時期に、そしてこの地域に、これまでに知られていないような形の住居跡が検出された

平成元年10月31日受理

\* 建築工学科助教授